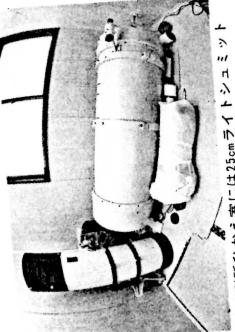




こちらは本誌編集部で集めした開所式参加申込みで当選した（左から）吉川典章君、伊賀 隆君、田嶋 幸君の3人。



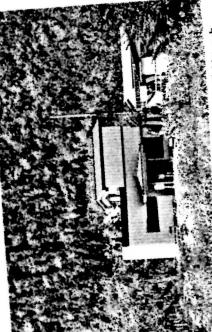
観測所ひかる室には35cm反射鏡作成に…、
と40cmカセグレンが無難操作に…、



観測所を記念してつくった
「いわき天体観測所」お分けし
て」B5判40頁をお分けし
ます。ご希望の方は口座振
替にて500円を東京7-51007
田中改名へ。



和歌山からかけつけた加茂 昭さんも…、「私
も筆の免許を取ることに決めました」。



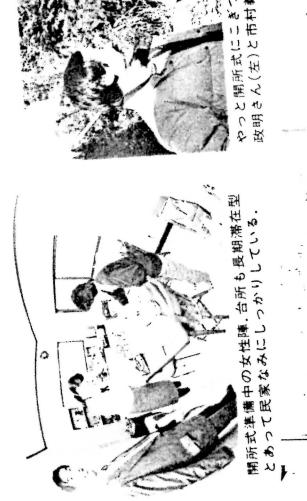
深まりゆく秋の中に、観測所の本番はいよいよ
いよいよスタート。頭張つてほしいネ。



前夜祭では国立天文台の香西先生による小惑星と彗星についてのお話もありました。



前夜祭の後は、降るような星空の下で心ゆくまで星団・星団を観察、星団を観察。



開所式準備中の女性陣、台所も活躍者在型



開所式に集まつた観測所のメンバー、皆、観測所にかける夢とハイタリティーがすごい、



「東京の光害から逃げ出して真っ暗な空の下で星を見たい」、東京に住む天文ファンなら誰でもがこう思っているはず。それを別荘風長期滞在型観測所をつくるて実現したグループがある。彗星観測者として知られている田中改明さんを中心とする、20人のメンバーチだ。観測所名は「いわき天体観測所」、場所は常磐自動車道を勿来で降り、国道289号線を西へ30分ほど行った山中だ。1983年から5年をかけて88年11月6日、開所式を迎えた。



望遠鏡はミカゲ製350赤道儀に30cm、7.7ニュートンと16cm純シリウムが、タカハシJUP架台にやはり純シリウムが同架されている。



山口正博先生(左)と清原元輔氏(右)原光学社長(右)もかけつけた。

深まりゆく秋の中に、観測所の本番はいよいよ
いよいよスタート。頭張つてほしいネ。

(編集部)

を開けるため「できるだけ自分たちの手で作ろう」をモットーにしたので、完成までだいぶ時間がかかってしまった。しかし、建物の一部はすでに出来上がつて、観測は可能な状態になつた。86年のハリーハリ彗星もしっかりと観測することができた。そして1987年1月22日に、メンバーの1人、市村義美さんがこの観測所で20×120双眼鏡で眼鏡により「市村彗星(1987d)」を発見してしまつてゐるのだ。つまり、観測所の完成より先に成果があつて、皆に観測所の存在を知られてしまつているのだ。

開所式は、5日に前夜祭があり、観測所近くの割烹で、約15人の会員と、本誌で募集中の会員3人との続々と、観測所に集まつた3人の読者の他、国立天文台の香西洋樹先生や和歌山からかけつけた加茂 昭さんをお迎えして盛大に行われた。この席で香西先生は「30cm級以上の望遠鏡をお持ちの方には小さな惑星の変光観測に挑戦してほしい」と、アマチュア天文家に新しい観測目標を提供された。

翌6日は開所式、ぬけようかな星空の下、観測所の広場には会員のものなしの料理が並べられた。そして所長の西村一二さんのおいさつ、地主さんのあいさつ、開所式出席者のお祝いの言葉などが続き、ほのぼのとしたステキな開所式だった。

(編集部)